

感性を磨き豊かに表現する
子ども達を育てる
～地域の力を活用し
豊かな体験を通す中で～



社会福祉法人 愛護会

金ヶ崎保育園

保育士 桂 有真

1 研究主題

感性を磨き豊かに表現する子ども達を育てる
～地域の力を活用し豊かな体験を通す中で～

2 主題設定の理由

4歳児の頃より園周辺の豊かな自然環境の中で、虫に夢中になり喜んで見たり虫採りを楽しんできた。5歳児になるとより一層「虫」に関心を示しミニ図鑑を持っては園庭に走りだし、毎日のように友だちと虫探しに夢中になる。虫探しや身体を沢山動かす運動遊びなど好きな遊びには、意欲的に取り組む姿がある。しかし、製作や絵描きの場面になると、目の前に紙があっても何を描いたらいいのか考え込んでしまい、なかなか描けずにいる子や友だちの絵を気にし、自分の絵と比べてばかりいてのびのびと描けない子などが見られる。又、自分が感じたことを表現することに関心を示さない子も多く見られる。

そこで、子どもたちの興味関心に寄り添いながら、クラスの友だちと共に園内外での楽しい活動を存分に行ったり、地域における素晴らしい力を持った方々の力を借り、地域にも出向きながら様々な自然体験、感動体験をしていく。その中で感性を磨き、見たり感じたりしたことを自分なりに表現したいとの思いをもち、様々な方法でのびのびと表現するなかで、喜びを感じ楽しんで表現していく子を育てていきたいと考え本主題を設定した。

3 研究のねらい

- ・子どもが示した興味関心に寄り添い、地域の方々の力を保育に活かし、豊かな感動体験を多くしていく中で感性を磨き、表現する意欲を引き出しながら楽しくのびのびと表現できる子どもを育てる。

4 研究の仮説

- ・地域の方々の力を得て、心動かされる様々な感動体験をすることで感性が生まれ、発見や気づきが増えることにより表現する意欲が引き出され、楽しくのびのびと表現する子どもが育っていくのではないかと。

5 研究の内容・方法

- ・地域との計画的な関わり（立花先生と虫・生活環境課とエコ活動）
- ・子どもたちが興味関心を示した遊びを土台とし、地域の方々の協力も得ながら豊かな感動体験をする保育の展開をしていく。
- ・のびのびと表現する楽しさを味わうことのできる保育の工夫、取り組み

方について考える。

6 研究実践

(1) 《地域の方々の力を活用する》

人的社会資源	ねらい
○立花先生との関わりの中で	・自然の中での感動体験を通して虫をはじめとした自然への関心を深めていく。
○生活環境課との関わりの中で	・リサイクルを通じた物づくりの楽しさを知る。
○施設のおじいちゃん・おばあちゃんとの関わりの中で	・手に触れ、優しさを肌で感じる。 (思いやりの心、優しさ)
○地域のおじいちゃん・おばあちゃんとの関わりの中で	・園内の様々な行事での交流。 ・風の子農園(畑仕事)を通してのふれあい。 ・散歩の中での挨拶、何気ない会話でのふれあい(思いやりの心、優しさ)
○町立図書館・図書館員さんとの関わりの中で	・月一回の“まなびい”(移動図書)では、園にはない絵本を借りることでより沢山の絵本にふれることができる。 ・絵本を通じた感動や創造の世界での心の成長を育む。 ・図書館員さんとの関わりでは、その状況に応じた挨拶をする。

(2) 保育実践

実践①

立花先生との関わりの中で・・・

～感動体験を通しのびのびと表現する楽しさを味わう～

4歳児の頃から虫への関心が高かった子ども達。園近くに在住しており、元教員・北上野鳥の会の会員でもある立花先生は、身近な動植物に関しても大変詳しく、子どもたちに毎年自然観察会などをはじめ、実体験の中で五感を使いながら楽しくお話をしてくださる。その豊富な知識を保育に取り入れながら感動体験を行っていく中で、子どもたちが気づきや発見をし、様々な

方法でのびのびと表現することを楽しむことはできないだろうかと考え、立花先生の協力も頂きながら取り組んだ。

こんちゅうは美しい生き物だ

むだな 命はない

立花先生が描いた昆虫の一覧表を目の前にすると「あ！オニヤンマがいる！」「かわいいちょうちよがいる」「こんちゅうすごい！！」その美しさからおもわず座っていた椅子から立ち上がり、夢中になって見た子どもたち。どの虫も一つ一つ丁寧に描かれていた。「こんちゅうは美しい生き物だ むだな命はない」「セミの一生が一番長い（5年ほど）他の虫たちは一年程度」「虫は描いてみると頭先からあしまでいろいろな模様でおしゃれだよ！描いてみると楽しいよ」立花先生からの言葉を聞いて、気持ちが高まった。

せんせい みて！みて！

朝、登園するとすぐに「せんせい みてみて！ぼく おうちで（虫の絵）かいたんだよ！」と、とてもいい表情で虫の表を見せてくれたY男。

保育園で立花先生から聞いたことや見たりしたことをお家の方に話し、一緒に調べたりして、立花先生の虫の表に刺激を受け自分なりに図鑑を見て描いてきた。

「うわーすごい！！」「立花先生みたい」「ぼくもかいてみよう！」「わたしも」周りの子どもたちからも「絵をかきたい」という言葉が沢山聞かれた。

毎日のように虫の絵を描いては、喜んで保育者や友だちに見せる子がいる反面、興味は示すものの“自分から描いてみよう”という気持ちにはなれずにいる子もいた。特にY男は絵を楽しんで描くことができず涙を流しうったえる姿がみられた。

そこで、どの子も“絵を描いてみたい”と思えるような発見や気づきのできる環境や心から感動できる環境の中であれば、表現する楽しさを味わうことができるのではないかと考えた。実際に沢山の虫、自然に触れられる機会を設けていくことにした。

アリってりっぱだな

園庭にある大きな桜の木の下にみんなで集まり、何かに夢中になる姿があった。子ども達の見線の先には小さなアリがいて、その小さな体で大きな桜の木にどんどん登っていくたくましさは、「アリってりっぱだな」「すごいな」と口ぐちに話す子ども達であった。虫に対する関心がより高くなり、小さなアリの動きにも目をとめ、気づきや発見を楽しむ姿が多くみられるようになってきた。

少しずつ身近な自然、虫に目を向けられる姿が見られるようになってきている。じっくり見ることで発見や気づきも増え、一緒に見て考える・感じられるような保育を展開していきたいと考えた。

さくらさんなら わかるかな

ゆり組4歳児から「このムシなんだろう」「さくらさんならわかるかもしれない」ということで、謎のムシを見せられたさくら組。それはさくら組もまだ見たことのない虫。早速、この時もみんなで図鑑を手に取り懸命に探したところ、「イタドリハムシ」ということがわかった。すぐに4歳児の保育室へ行き、「この虫はイタドリハムシです」と伝えると、「さくらさんすごい」「さすがだね」と沢山褒められ、とてもうれしそうな表情を見せ自信にもつながった。

この経験をきっかけに、絵を描くことが苦手だった子が、自分たちで調べた虫を描こうとする姿が見られた。又、クラス内のグループ名も“虫”にしたことで、今まで“描こう”としなかったY男も、自分のグループ名の虫を同じグループの友だちに教えてもらいながら描くことができ、とてもいい表情をみせた。

その日の迎えの時

初めて大きくのびのびと虫を描くことができたY男、その絵を家の人に見せると

家の人 「Y男！すごいね！！ なんていう虫なの？」

Y男 「ごまだらかみきりだよ！」

と、とても嬉しそうな表情で答えた。その後、絵を描く機会があるたび、一人でも虫を描く姿があった。

○さらに、虫への関心を高めていきたいと考え、立花先生に自然観察会を依頼することにした。

自然観察会

—「目でよく見て、耳でよく聞く」—

立花先生の案内で園周辺を約2時間ほど歩き鳥の観察会を楽しむ。「お母さん鳥が卵を一生懸命あたためている周りでは、お父さん鳥が敵が近づかないように鳴くんだよ」と、立花先生の話聞き鳴き声が聞こえると「しずかに！」と自分たちでも気を付け合う姿が見られた。また、道端の草花にとまった虫を見つけると「あ！これイタドリハムシだ」「ゆりさんに教えてあげたよね」と、以前自分達で調べ覚えた虫の名前を友だちと言いながら、実際に手に取り会話が弾んだ。



「あ！この虫いたね。まるをつけよう！」～自然観察会の様子～

○戸外で小さな虫を友だちと一緒に見ては、名前が分からない虫を図鑑で調べたり、自然観察会等で立花先生から今まで知らなかったさまざまな虫についても教えてもらったことで、絵を描く楽しさが味わえるようになってきた。

牛乳パックの虫図鑑作り

5月のリサイクル教室後、おやつに出る牛乳パックを洗うのが毎日の日課になった。牛乳パックを洗う事が楽しくなっている子ども達の姿を見て・・・

- ㊦「皆が毎日洗っているこの牛乳パック、何かに使えないかなあ」
- ㊦「しろいところに絵はかけそうだね」
- ㊦「そうだね！！いいことに気がついたね！！」

「牛乳パックの白い所に虫を描くのもいいね。描いたことある？」

「やってみる？」

㊦「かきたい！かきたい！！」「かたくてこわれないし」

油性ペンを手に取ると早速虫を描き始めた子どもたち。1枚に何種類も丁寧に描き、色付けをしていく子、細かく小さい虫をたくさん描く子と様々である。中にはアリの巣をかき、周りの子ども達をびっくりさせる子もいた。

“大好きな虫の絵をかく”という特に関心の高い活動の中で子どもたちはペンの貸し借りも、普段よりスムーズに行う事が出来た。

㊦「あれ？皆が描いたものをこう重ねると、皆の知っているものみたいだね。なんだろう？」

㊦「虫の本？」「あっ！虫図鑑だ」

㊦「そう！そう！！」

「はやくちいさいクラスのおともだちにもみせたいね」

みんなが夢中になった虫の図鑑づくり。

《牛乳パックの虫図鑑のできあがり》



「虫図鑑を夢中になって
作っている子どもたち」

「牛乳パックの
手作り虫図鑑」



いっしょに見ようね

3歳児を招待し、手作りの虫図鑑をみんなで見た。自分達が描いたこともあり、いつも以上に積極的に話しかけたり中には小さい子の背中に手をまわし、「これはねカブトムシだよ」と優しく言葉を掛ける姿が見られた。手作り図鑑を見たあとは3歳児の子どもたちと一緒に虫の絵を楽しんで描く姿があった。自分からマーカーを貸してあげたり、小さいクラスの子ども達の声に耳を傾け、会話を楽しんでいた。

「手作りの牛乳パックの 虫図鑑を見ている子どもたち」



沢山の楽しい活動を経て、1泊2日の年長組お泊り保育では様々な虫になり、身体リズム運動遊びも取り入れた運動遊び（なわとび・とびばこ・ボールつき・鉄棒・マット運動）を見せる。その他、保育室を虫の国とし、小さい子どもたちを招待しての虫捕り遊びを楽しんだ。

《考察》

- ・子どもたちが興味関心を示した虫のことであったり、立花先生が描いたきれいな虫の表を見せていただくことで感動し、「ぼくたちも、かいてみたい！」という気持ちになっていった。
- ・地域の方の力を借り、園内だけでは経験できない身近な自然に触れて心が動かされる感動体験をする中で、喜んで絵を描く姿が見られるようになってきた。
- ・「うわぁ すごいね!」「ほんものみたいだね」など、褒めたり、描いた絵を掲示したりすることも周りの子どもたちにとって刺激となり、クラス全体に虫を描く楽しさが広がった。
- ・小さいクラスの子どもたちに、虫の名前やエサとなるものを教えたりすることで、「自分たちが頼りにされている」「なんとかしてあげたい」「よろこんでもらってうれしい」という思いが子どもたちから伝わり、心が大きく成長した。
- ・虫図鑑作りでは、友達の工夫を認め合う姿があったり、小さいクラスのおと

もだちはどんな虫を喜ぶかなと話し合い、友達を思いやる気持ちも感じられるようになってきた。

「虫の国」で小さいクラスの 子どもたちと一緒に虫とりをした様子



「バッタになって飛び箱を飛んだ様子」

実践②

生活環境課との関わりの中で・・・

～リサイクルを通じた物づくりの楽しさを知る～ “ゴミのポイ捨て もったいない！リサイクル教室”

ワケルマン、ゴミラによるリサイクルの劇の中で

- ・きれいに洗い、リサイクルできるものはきちんと分別する
- ・きちんと分別すれば新たに生まれ変わる。それがリサイクル

という事を学んだ。大きなパネルに表示された様々なマークを見て、実際にアルミ缶・お菓子の袋・牛乳パックなどを使っての分別学習では一つ一つ手に取り、生活環境課の人たちと一緒に真剣な表情でマークを見つめ分別する姿が見られた。牛乳パックはノートやトイレットペーパーに、アルミの缶は車のエンジンの一部になることなども聞き、「すごい！すごい！！」子どもたちの関心は高まっていった。

そこで、生活の中で出来る取り組みとして、物を大事にし身近な廃品を使い物作りの楽しさを味わえるようにしたいと考えた。



**「あ！リサイクルマーク
みつけた！」**

○リサイクル教室後、早速「僕たちにできることは」とクラス内で話し合い、毎日のおやつに出る牛乳パックをきれいに洗い、何かに活用することになった。“リサイクル♪リサイクル♪”と喜んで交代で洗う子どもたち。しかし、中には関心を示さず、自分の順番が来た時だけしかたなく洗うK男の姿もあった。

車づくり

「ぼくたちも牛乳パックでなら車が作れるんじゃない？」「作ってみたい」「小さいクラスのおともだちをのせたらいいんじゃない？」という声が聞かれ、子どもたちが感じた物づくりへの興味関心を受け止め、牛乳パックや廃品を使っての車づくりを楽しむ。(小さい組の子どもたちに牛乳パックの車をプレゼント)

小さいクラスの子どもたちに喜ばれ作る楽しさも実感。一台の車をグループ毎に製作したため、ひとつのものを友だちと協力しあって作る楽しさも味わう。又、車完成までに沢山の牛乳パックが必要と分かり、今まで以上に張り切って牛乳パックを洗う子どもたち。しかし、K男が進んで行う姿は見られない。K男も友だちと一緒に表情良く生き生きと活動できるためにはK男が得意な絵かきで興味や関心をもてるようにする事が大事だと感じた。



**「牛乳パックに新聞紙を
つめて作った“車づくり”」**

牛乳パックを利用したうちわ作り

毎日おやつに飲む牛乳パックを利用し、皆で牛乳パックのうちわを作った。普段から交流のある大好きなおじいちゃん、おばあちゃんたちを初めとし、日頃からお世話になっている消防署・警察・生活環境課の方々にもプレゼントをした。

町内どこへ出かけても自分たちが作ったうちわが置かれているのを目にすると「あっ！ぼくたち、わたしたちがつくったうちわがあるよ！！」と得意げな子どもたち。「これちょうどいい大きさだね。」「上手に描けてるね」「これがあるととても涼しいよ」など沢山お褒めのことばを頂き、とても嬉しそうな子どもたちであった。

はじめは、うちわ片面に対し虫1匹を大きく描いただけのデザインだったが、日に日に1匹から2匹3匹と増え絵を描くのが苦手だった子は、得意な子の真似をしながら描く楽しさを味わうことができた。徐々に背景にもこだわり、丁寧に描く子や物語風にイメージを膨らませて描く子が増えていった。また、「ぼくカマキリかけるよ」「〇〇ちゃんすごい！」「うわあ！きれい」など友だちが描いたうちわの絵を認め合い、褒め合う姿がみられた。絵を描くことが好きで、さまざまな虫をどんどん描くK男。K男は周りの子からも「すごい！」「じょうずだ！！」という言葉をかけられることも多く、うちわ作りはK男が認められる場にもなっていた。そんなK男は徐々に気持ちの面でも変化が見られ、自分から「ぼくが牛乳パックあらうね」と笑顔で積極的に牛乳パックを洗うようになった。



「牛乳パックのうちわ作りの様子」

たくさんのうちわが完成！！



ワケルマンにプレゼント

「ワケルマンいるかな」「ゴミラいるかな」と大きなうちわをかかえワケルマンがいる金ヶ崎町役場へ。ワケルマン達にプレゼントするうちわは、ワケルマン達の体にあわせて牛乳パック5個分を広げた巨大なうちわ。みんなで協力し、ひとつのうちわにワケルマンやゴミラを中心に、たくさん絵を描いたものをプレゼントした。役場職員の方々にも牛乳パックうちわをプレゼントし、とても喜んで頂いた。

—広報 かねがさき7号の表紙より— *うちわを届けに行った時の様子



金ヶ崎保育園児が役場を訪問
ワケルマン、ゴミラ大好き！

《7月号の表紙》

金ヶ崎保育園児が役場を訪問 ワケルマン、ゴミラ大好き！

金ヶ崎保育園(及川牧子園長)の年長組の園児は7月9日、役場を訪れ、リサイクルヒーローのワケルマン、ゴミラや町職員に牛乳パックで作ったうちわをプレゼントしました。

うちわは「ごみらわかるまんだいすき」というメッセージやイラスト入り。園児らは日々リサイクル推進に取り組むワケルマンらが涼しく活動できるようにと、うちわを贈りました。ワケルマンとゴミラは「これがあれば涼しく活動できる。これからも一緒にリサイクルをがんばろう」と園児らに語りかけていました。

- ▶ 撮影日 7月9日
- ▶ 撮影場所 役場1階

ワケルマンとゴミラに
プレゼントした牛乳パック
5個分の大きなうちわ



ワケルマンと子どもたちとの会話の中で

子：「いつもどんな仕事しているんですか」

ワケルマン：「金ヶ崎町を見回りし、ゴミが落ちていたら拾っているんだよ」

その後、子ども達から「ワケルマンとゴミラ、大変なんだね
ぼくたちもゴミが落ちていたら拾おう」との声が聞かれた。この日
をきっかけに「あ！こんなところにゴミが落ちてる」「ゴミすてち
ゃだめだね」「ゴミラ達だけで拾うの大変だよ」と今まであまり
意識していなかったゴミにも目を向けるようになった。



「金ヶ崎町役場でワケルマンとゴミラにうちわをプレゼント」

○園で牛乳パックのリサイクル活動が習慣になってくると「せんせい！お家にこんな物があつたよ！！」「何かに使えそう」「これで何かつくりたいな」と家庭から様々な廃品を持ってくる子が多くなってきた。牛乳パック以外にもリサイクルしようという気持ちを持ち始めている。

虫作り

実際に見たり触れたりした虫を作る時、素材をねじったり様々な素材を組み合わせるなどの工夫が見られるようになった。虫作りを通して、様々な廃品や素材を組み合わせる楽しさを味わうことができた。



「牛乳パックでツノをつくろうかな」～廃品を使つての虫作り～

飛行機作り

園外保育で訪れた花巻空港で大きな感動を受けた子どもたちから「今日小さいおともだちきていないから、小さいおともだちにひこうきつくってあげたいな」という言葉が聞かれた。小さいクラスの子どもたちを思う気持ち、優しさが育ってきている。大きな飛行機を完成させた子どもたちは達成感と満足感、作る楽しさを十分に味わうことが出来た。小さな廃品から大きな乗り物を作ることができるという喜びを味わった。

実践③

地域、保育園、家庭とのつながりのなかで

地域の方々の協力を得ながら、地域と共に進めてきた保育の中で、子どもたちの育ちを喜び合う場を・・・

運動会

- ・虫に興味を示したことから、“むしのくにのうんどうかい”を行う。どの競技も虫を表現した動きを取り入れたり、廃品を利用して必要な道具作りも行った。牛乳パックの手作りのうちわも、運動会に来てくださった祖父母や来賓の皆さんにプレゼントをして喜んで頂いた。

クリスマス会

- ・一年を通して経験したことからお話づくりをし、世界にただひとつのおはなし「虫さんとふしぎな箱」の創作劇を行う。全園児がひとつの場面で共に演じる為、小さいクラスの子も達の手を優しく引く姿、友だちに台詞や動きを教える姿等、小さいクラスの子も達をリードしながら自分たちも大きな声で歌ったり、台詞を言う姿があった。
- ・劇の話の中にはリサイクル教室で学んだ“リサイクル”の場面も登場し、職員作曲の楽しい歌を元気よく歌ったり、廃品で劇中で使う物も作り、ますますリサイクルが身近なものとなった。

お店やごっこ、作品展

- ・一年間の子どもの成長をお家の方、地域の方と共に喜びあう「作品展・お店やごっこ」。「虫の国のお店やごっこ」と題し、廃品を使っての品物作りを3・4・5歳児で行った。

- 虫が沢山いる「**ペットや**」
- みんな大好き「**おかしや**」
- 感動をした花巻空港での経験から「**乗り物や**」

- ・3つのお店の他、絵の展示では絵や版画などさまざまな素材に触れ描くことを楽しんだ。共同製作ではクリスマス会で自分が演じた役を0歳児から年長児までがその年齢、発達に合わせ製作で表現した作品を展示。年長児は自分が演じた役の人形を製作。今にも子ども達の声が聞こえてきそうなほどの生き生きとした作品となった。さらに、今年度は金ヶ崎町役場、生活環境課の職員の方、ワケルマン、ゴミラの協力を頂いた「エココーナー」では親子でリサイクル教室を楽しく学ぶことができた。

《考察》

- ・地域の方の力も借りながらリサイクルの大切さを学び、物を大事にすると共に、そこから作り出す楽しさも活動を通して味わうことが出来た。
- ・体験したことで子どもたちが感じたこと、興味関心を示したことを言葉にしたとき、保育者は見逃さず遊びへとつなげていくことで遊びはどんどん広がる。
- ・関心を示したことから遊びへと発展させ、取り組むことでさらに関心は高まり、「やってみよう」とする気持ちが生まれた。
- ・子どもたちの身近にいる保育者や地域の方々に「助かるよ」「ありがとう」と褒めていただいたり、感謝の気持ちを言われることで、自分たちも小さい子どもたちに優しく接する姿が自然に身についてきた。

7 研究の成果

- ・地域がもつすばらしい力を保育の中に活かしながら展開していくことで、園内だけでは味わうことの出来ない豊かな体験を通し、子ども達の感性が磨かれていくことを感じとることができた。子ども達は沢山感じ、発見したことを「伝えたい」「描きたい」「つくりたい」と心が動かされ、のびのびと表現する楽しさを味わうことができた。
- ・大人だと見過ごしがちな廃品を使い、視点を少し変えることで遊びは広がり、廃品を利用し作ることにより、子ども達の想像力は豊かに膨らみ工夫する力が育った。
- ・子どもたちの園内外での活動の様子や成長をクラスだより等を通して家庭に知らせていくことで、共通理解のもと共に連携を取り合いながら保育を進め、子どもたちを育てていくことにつながった。
- ・興味関心を示したあそびから地域の人との関わりや異年齢交流を楽しむ中で、子どもたちは「優しさ」や「思いやり」の気持ちを育むことにつながった。
- ・地域の方々との関わりの中で得た豊かできざまな感動体験は、園内だけにとどまらず、園と地域とのつながりがより深まっていくことにもなるのだと感じた。

8 今後の課題

- ・保育士が地域の方の力を保育に取り入れどのように展開させていくか、保育士自身の感性も大事である。協力を活かし心が動かされるような保育のあり方を今後も考えていきたい。
- ・地域と共に手を取り合い、様々な感動体験を通して子どもたちの心を豊かに育む保育を進めていきたい。
- ・今後も身近な地域の方々の力を取り入れ、沢山の感動体験をする中で育つ子どもを目指して保育に取り組みたいと考える。